

コミュニケーション英語 I、II、III¹の
文学教材に含まれる文法項目

Grammatical Items Included in Literary Materials in Authorized
High School Textbooks for English Communication I, II, and III

西原 貴之

広島大学

Takayuki NISHIHARA
Hiroshima University

Abstract

Literary materials are generally considered grammatically difficult. Unfortunately, a variety of grammatical items in literary materials are under-specified at the moment, which makes it difficult for Japanese teachers of English to plan teaching practice using these materials. Consequently, teachers often avoid using literary materials in class. This research examines grammatical items included in literary materials in authorized high school textbooks for English Communication I, II, and III and discusses what grammatical items teachers are likely to meet when teaching with literary materials. The textbook analysis shows that these materials include a variety of grammatical items which generally fall outside the scope of high school English language teaching in Japan: these include grammatical items related to narrative structures, somewhat archaic items, and items which may contradict what Japanese learners of English have been taught in class (they often reflect current grammar changes). Similar studies with different texts need repeating to make literary materials more accessible for teachers.

1. はじめに

文学教材は現在でも文部科学省検定英語教科書（以下、「教科書」）の中に含まれている。しかし、一般に「文学教材は英語が難しい」と考えられる傾向があり、教師に敬遠されることが多いように感じられる。現に、多くの英語教師は文学教材を使った指導に不安を抱えていることが報告されている。

教師がこのような不安を感じる1つの原因として、文学教材にその校種での指導範囲を超えた言語項目が含まれている点が挙げられよう。残念ながら、高等学校英語教科書の文学教材に、実際にどの

ような言語項目が含まれているのかこれまで調査がなされていない。このような調査結果があれば、教師は文学教材を扱う際に言語項目に関してどのような準備をすればよいか事前に見通しを持つことができ、指導に関する不安を軽減することができよう。³また、このような調査結果を蓄積していけば、文学教材も自信をもって指導できる教員を育成するために教員養成課程の中でどのような教育を施すべきか検討する有益な資料ともなる。

文学教材については、学習者の英語学習動機を高める、言葉の創造的側面に触れさせる、など、様々な利点が現在指摘されている (e.g., Lazar, 2016; 吉村・安田他 (編), 2013; 西原, 2019)。しかし、こういった利点は、文学教材の言語的難しさに十分な対処がされた上ではじめて享受できるものと言えよう。

本研究では、文学教材を難しくしていると考えられる言語項目のうち、特に文法項目に注目し、文学教材の中ではどのような文法項目が見られるのか調査した結果を報告する。具体的には、高等学校英語教育に焦点を絞り、コミュニケーション英語I、II、IIIの教科書(全数調査)から文学教材を抽出し、その教材の中にどのような文法項目が見られるのか、を調査した結果を報告する。

もちろん、文学教材の中で具体的に用いられている文法項目は、教科書が改訂されれば変化することが予想される。例えば、本研究で見られた特定の文法項目が見られなくなったり、逆に新たな文法項目が入ってくることは想像に難くない。本研究は、コミュニケーション英語I、II、IIIの教科書分析を通して、文学教材に見られる文法項目の大まかな傾向の一例を示すことを目的としている。本研究と同様な調査は他の時代の教科書においても繰り返され、徐々にデータを蓄積していくことで、教師が文学教材を使った授業をする際の手立てをより充実させていくことが必要である。本研究はその第一歩を目指したものである。

2. 「文学教材」の定義

本研究では、教科書から文学教材を拾い出し、その中に含まれる文法項目について調査を行う。したがって、「文学教材」について規定しておく必要がある。本研究は、高等学校英語教科書に含まれる文学教材の特徴を調べるより大きな研究プロジェクトの成果物の一部であり、文学教材の定義はそのプロジェクト全体で用いているものに従っている。この研究プロジェクトにおいては、「目次、課のねらい、設問、出典などから判断して、何らかの形で文学作品として扱うことが教科書内で期待されている」と判断される場合に、その教材を「文学教材」とみなして調査対象とした。このように、「教科書制作者側のねらい」という観点からこの概念を緩く規定している。本稿では、紙面の都合上この定義の背景については省略する。詳細については、西原(2019, 2020a)を参照されたい。

3. 文学教材と文法の難しさ

一般に文学教材は文法的に難しいと言われている。文学教材がこのような特徴を持つ傾向があるのは、いくつかの理由によると考えられる。まず、文学教材の原作の表現がそのまま残されることがあるという理由があろう。文学教材に限らず、何らかの原作をもつ教材は、教科書に掲載される際に、改作が施される場合がほとんどである。文学教材の場合、学習者に原作の魅力を少しでも経験させた

いと思えば、当然原作に極力手を加えることなく教材化されることとなる。Widdowson (1992) らが指摘しているように、文学作品においては、作者は他の言い方では表現しがたい意味内容を独特の表現によって読者に伝えようとしている。そのような表現を極力改作後も残そうとすれば、結果としてこれらの表現に付随する文法項目もそのまま文学教材内にとどまることとなる。

2つ目の理由として、文学教材は、現在では正課外に位置づけられることがほとんどであることが考えられよう。正課外の課では、特定の文法項目が導入されることは稀であり、さらに学習者に文法や語彙などを気にせずにある程度の分量の英文をストーリーを楽しみながら一度に読ませることが重視されている。仮に難しい文法項目や語彙が含まれていても、欄外に訳註を示すことで、学習者の読みが妨げられないように工夫がなされている。結果として、高等学校では扱わないような文法項目が含まれていても、あまり気にすることなく原作の表現を残すことが可能である。逆に、正課であれば、高等学校で学習しないような文法項目は別の表現に書き換えることになるであろう。

以上のように、文学教材は多くが正課外に位置づけられ、文法などをあまり気にすることなく原作の巧みな表現を残すことが可能であるため、結果として文章中に難しい文法項目が含まれることが多くなると考えられる。

なお、英語文学作品自体がそもそも文法的に難しい傾向があることもその一因であると考えられる読者がいるかもしれない。確かに、文学史の中には文法的に難しい作品がある。例えばHerman Melvilleの作品などは1文が長く、文法構造も複雑であることが知られている。また、教科書によく掲載されるO. Henryの作品も、原文には難しい文法項目が多く含まれている。しかしながら、原文であっても比較的読みやすい作品もある。例えば、William SaroyanやI. B. Singerの作品などは文法的に比較的容易であることが多い。このように、文学作品というジャンルの言語が元来文法的に難しいとは必ずしも断言はできない。本論文では、英語母語話者向けの表現が書き換えられることなく、教科書の中に残りやすいことが、文学教材の文法を難しくしているという立場を取る。

4. 調査対象

本調査で分析対象とした教科書は、西原 (2019, 2020a) 同様、前回の学習指導要領 (2009年公示) が実施された最初の段階で、コミュニケーション英語I、II、III用に出版された教科書全25種計71冊である。詳しい情報については、西原 (2019, 2020a) を参照されたい。

5. 調査方法

分析においては、慣習的に高等学校英語教育での学習内容の外に置かれてきた文法項目⁴を抽出し、それらを伝統文法で用いられる文法カテゴリー (e.g., 安藤, 2005) に応じて分類した。観察された文法項目の傾向を検討したところ、(a) 物語形式との関りが強い文法項目、(b) 現代英語に新たに生じた変化などを反映した結果高等学校での指導内容と矛盾を引き起こしている文法項目、が一定数見られることが分かり、これらを大きなカテゴリーとして設定し、関連する文法項目をこれらの大きなカテゴリーの中に位置づけ直した。これら2つの大きなカテゴリーは、それぞれ「物語形式と関連した文法項目」、「高等学校での指導内容と矛盾を引き起こす文法項目」と命名した。そして、(c) この両者

に関わらない項目（慣習的に高等学校の英語教育の学習内容の外に置かれてきた項目のうち、物語と特に強く関わるわけではなく、かつ現代英語の新たな変化を反映しているわけでもない項目）を「高等学校での扱いが一般的ではないその他の文法項目」として一括りにした。(c)のカテゴリーに含まれる文法項目には特に共通性はない。

もちろん観察された文法項目に対して、本研究とは異なる大括りのカテゴリーを設定することは可能である。本研究が用いるカテゴリーは、文学教材にはどのようなタイプの文法項目が含まれているのか、文学教材を使って指導をする際に教師はどのような文法項目に対処する必要があるのか、という関心に対して設定可能である区分のうちの1つに過ぎない。そこで、読者がさらに別の観点からの検討が可能となるように、以下では大括りのカテゴリーの下に、高等学校英語教育では指導が一般的ではない文法項目として観察されたもの（種類）を、すべて列挙しておく。⁵

5.1 物語形式と関連した文法項目

理論上、文学教材は、小説はもちろんのこと、詩、戯曲、漫画など様々なものを含む (McRae, 1991)。しかしながら、今回の調査では、ほとんどが小説（短編小説も含む）であった。小説は物語の形態に従うため、結果として物語形式と密接に関わる文法項目が見られた。現在の高等学校の教科書は論説文の課が多いため、結果として物語形式と関わる文法項目は学習者にとってはあまり見慣れないものとなる。現に以下の例が示すように、これらの文法項目は高等学校で指導されることは稀である。

【話法】

・自由話法

(1) Two days before the first term ended, I borrowed the 2009 yearbook from a teacher. I couldn't talk with Madoka any longer, but I still wanted to know what she was like. She was not in the group photo, but I found her picture placed in the corner of the group photo. Why? The teacher said, "This student died during summer vacation in an accident at sea." What? Have I seen a ghost through the window? No. She's Madoka living in the first term in 2009, which means that she would leave this world in a month or so ... (*My Way III*, "Reading 1: A Special Moment in the Third Period," p. 132)

(2) Mitch thought about Pamela's phone call. What kind of emergency could there be at 5:30 in the morning? Was there water everywhere? Was someone trying to break into her house? He hurried to Pamela's house. (*Discovery III*, "Reading 1: Love at First Sight," p. 53)

・中間話法

(3) She asked me was I going to Araby. (*Unicorn III*, "For Reading 3: Araby," p. 172)

・引用符のない直接話法

(4) Now listen, mummy, I was telling her, you simply mustn't take advantage of a tired old man in this way. It's a rotten thing to do. My mother looked back at me. Then she said to the little man, "I don't think it's quite right that I should take an umbrella from you worth twenty pounds. I think I'd just better give you the taxi-fare and be done with it." (*Pro-Vision I*, "Reading 2: The Umbrella Man", p. 150)

(5) - And why can't you? I asked. (*Unicorn III*, "For Reading 3: Araby," p. 172)

(6) Now and then, she said, bad things start growing inside us. Sometimes you can cut them out and other times you can't, and for Linda it was one of the times when you can't. (*Polestar III*, "Further Reading: The Things They Carried," p. 159)

【読者や一般人を指すyou】

(7) Now he realized that the best change happens inside of you – like when you believe a change can lead to something better. (*New One World III*, "Supplementary Lesson 1: Who Moved My Cheese?," p. 77)

(8) He was obviously grateful to us, and you could see he was pleased when Mr. Kaufmann promised to do what he could for him on his return to Amsterdam. (*Perspective III*, "Optional Lesson 2: Cellists," p. 133)

(9) Life wasn't so bad if you knew how to appreciate it. (*Prominence III*, "Option 3: A Summer's Reading," p. 171)

(10) In the silence, you could have heard a pin drop. (*Big Dipper III*, "Lesson 25: The Joker," p. 108 / *Vivid II*, "Further Reading 2: The Joker," p. 167)

【歴史的現在】

(11) I am sitting in an overstuffed chair in the lobby of The Dominion Imperial International Hotel. ... (*Perspective II*, "Reading 1: May I Have Your Autograph?," p. 72)

【後方照応】

いきなり代名詞で作品が始まり、その指示対象を後で明かす形で物語を展開させている例が見られた。

(12) It was twenty years ago and I was living in Paris. I was earning just enough money to live. She had read a book of mine and had written to me about it. (*Crown I*, "Reading 2: The Luncheon," p. 158)

(13) They had grown up next door to each other, on the edge of a city, near fields and woods and orchards, within sight of a beautiful⁶ bell tower that belonged to a school for the blind. (*On Air II*, "Story 2: Long Walk to Forever," p. 92 / *World Trek III*, "Reading 2: Long Walk to Forever," p. 131)

なお、物語では人物の動作が詳細に描写されることが多い(西原, 2019)。作者は、その行動描写によって読者に登場人物の心情を推し量らせるなど、物語世界に関して推測を促すこととなる(いわゆる行間を読ませる作業に従事させる)。現に今回の調査対象でも、動作に関わる様々な表現が観察された。これらの表現は文法項目というよりはイディオムと呼ぶべきものかもしれないが、文学教材を難解にしている要因の1つと考えられるため、以下にその例を示す。

(14) One afternoon Jimmy Valentine, with his suitcase in hand, climbed out of a cab in Elmore, a little town five miles off the railroad down in Arkansas. (*Element II*, "Pleasure Reading: A Retrieved Reformation," p. 154)

(15) She rose to her feet and this action soothed his anger; (*Perspective III*, "Optional Lesson 2: Cellists," p. 139)

(16) "Did you think I would throw myself into your arms?" she said. (*Prominence II*, "Option 1: Long Walk to Forever," p. 69)

5.2 高等学校での指導内容と矛盾を引き起こす文法項目

一見すると高等学校英語教育での英文法の指導内容と矛盾するような表現も見られた。これらの扱いについては教師は一層の慎重さを求められると考えられる。従来の規范文法からずれてはいるものの、実際に英語母語話者がコミュニケーションの中で使用している「生きた英語」であるものが多い。

(17) He must shoot it as if it is the only arrow he has. (*Mainstream II*, “Optional Reading 3: Tsurezuregusa,” p. 174) (高等学校ではas if it wereの形が一般的)

(18) I want to know different things than they learn there, if you know what I mean. (*Prominence III*, “Option 3: A Summer’s Reading,” p. 170) (高等学校では前置詞はfromが一般的)⁷

(19) Go look at the roses again. (*Element II*, “Further Reading 2: The Little Prince and the Fox,” p. 116) (高等学校では原形不定詞は使役動詞や知覚動詞が使われる構文の中、助動詞の後や命令文に限られて指導されることが一般的である。この例は動詞間のandが省略された結果と解釈できるが、それでもこの表現はあまり扱われないように思われる。)

(20) Your buggy’s waiting for you, ain’t it? (*Element II*, “Pleasure Reading: A Retrieved Reformation,” p. 160) (高等学校ではisn’t)

(21) “Spanish. I ain’t so good at it, even if I’m Mexican.” (*Polestar II*, “Further Reading: Seventh Grade,” p. 174) (高等学校ではam not)

(22) I gave him water two times already. (*Vivid III*, “Further Reading 2: Becky and the Wolf,” p. 146) (高等学校ではtwice)

(23) Can’t you do something, Ralph – try, won’t you? (*Element II*, “Pleasure Reading: A Retrieved Reformation,” p. 159) (高等学校では否定文と疑問文ではanythingを使用するように指導される段階にとどまることが多い)

(24) These French white wines are wonderful. (*Crown I*, “Reading 2: The Luncheon,” p. 160) (高等学校ではwineは不可算名詞とされるのが一般的)

5.3 高等学校での扱いが一般的ではないその他の文法項目

以下に挙げる文法項目は、慣習的に高等学校の英語教育の学習内容の外に置かれてきた文法項目として観察されたもののうち、上記2つのカテゴリーから漏れたものを一覧にしたものである。様々なジャンルのテキストに従来から用いられてきた文法項目と言える（ただし、【その他】の例のように廃用になりつつあるものも含まれている）。

【様々な倒置や移動】

通常、高等学校での指導は、否定表現（hardlyやlittleなど）が前に置かれることで生じるケースに限られる傾向がある（as移動については指導されることもある）。しかし、今回調査した文学教材には様々なものが見られた。

・場所句倒置

(25) On the first planet lived a king who always gave orders. On the second planet lived a man who was very vain. On the third planet lived a man who drank to forget his drinking habit. On the fourth planet lived a

businessman who counted planets to own them all. On the fifth planet lived a man who lit a lamp. ... On the sixth planet lived a geographer who drew maps, but he never traveled. (*Vista I*, “Enjoy Reading!: The Little Prince,” p. 112)

(26) An aunt belonging to the children sat in the corner seat, and in the further corner seat on the opposite side sat a bachelor who was a stranger to their party, but the small girls and the small boy had taken over the compartment. (*Crown III*, “Story 3: The Storyteller,” p. 158)

(27) Right in front of Haw was Cheese Station N! (*New One World III*, “Supplementary Lesson 1: Who Moved My Cheese?,” p. 76)

(28) At the corner stood a drugstore, brightly lit. (*Power On II*, “Reading 1: After Twenty Years,” p. 62)

・ 主語補語倒置

(29) Thinking back on the good old days, the Rabbit wept helplessly. When a tear fell to the ground, a strange thing happened. From where the tear had fallen, a flower grew. Stepping out of it was a beautiful fairy. (*Discovery II*, “Lesson 8: The Velveteen Rabbit,” p. 104)

・ as移動

(30) “One day, hard as it is to believe, each and every one of us is going to stop breathing, turn cold and die!” (*Prominence III*, “Option 2: Dead Poets Society,” p. 161)

・ 目的語の文頭への移動

(31) This he did happily. (*Unicorn I*, “For Reading 1: The Man Who Walked Between the Towers,” p. 80)

(32) “Can – can you come to the wedding, Newt?” she said.

“That I doubt,” he said. (*On Air II*, “Story 2: Long Walk to Forever,” p. 93 / *World Trek III*, “Reading 2: Long Walk to Forever,” p. 132)

【様々な構文】

高等学校での指導が一般的ではない構文も観察された。

・ way構文

(33) “I don’t know how my tablecloth made its way here,” she wonders. (*Landmark III*, “Reading: The Tablecloth,” p. 71)

(34) To enjoy the cherry blossoms we should not force our way through the crowds just to get to a good place under the trees. (*Mainstream II*, “Optional Lesson 3: Tsurezuregusa,” p. 172)

・ 移動構文

(35) Slowly, he turned away from the bar and edged back through the crowd to where his hat and coat were hanging. (*Pro-Vision I*, “Reading 2: The Umbrella Man,” p. 154)

・同族語構文

(36) At that moment a whistle whistled. (*Genius II*, “Read On! 5: Snow Crossing,” p. 181)

・右方転移

(37) It is a fearsome thing, this frosty-nosed stare of my mother’s. (*Pro-Vision I*, “Reading 2: The Umbrella Man,” p. 148)

・左方転移

(38) When she came up to me, she said, “The way you played the cello, it sounded like a barking dog!” (*Vivid II*, “Reading: 1,000 Winds and 1,000 Cellos,” p. 137)

【様々なタイプの疑問文】

高等学校では、倒置を伴う通常の疑問文(一般的なyes-no疑問文、主語以外の部分を問うwh疑問文)、主語を問うwh疑問文、選択疑問文、付加疑問文などに指導が限定される傾向がある。しかし、一般的な文法書など(e.g., 有村・天野, 1987; 安藤, 2005; 瀬田, 1997)にも示されている通り、他にも様々なタイプの疑問文がある。今回の調査でも、以下のようなタイプの疑問文が見られた。

・平叙疑問文

(39) “He did it himself?” (*Crown II*, “Reading 1: Sun-Powered Car,” p. 82)

・問い返し疑問文

(40) “Are people being exterminated today?”

“Are they what?” (*Landmark II*, “Reading 1: What Happened to Mark?,” p. 71)

(41) “I’ve never forgotten it before,” he said.

“You’ve never forgotten what?” my mother asked sternly. (*Pro-Vision I*, “Reading 2: The Umbrella Man,” p. 148)

(42) “He’s showered and is relaxing now. He’s feeling rested, triumphant, and receptive.”

“Receptive to what?” (*Perspective II*, “Reading 1: May I Have Your Autograph?,” p. 73) (情報の追加を聞き手に求めている表現であり、厳密には問い返し疑問文ではないが、文法構造が同じであるため便宜上ここに含めた)

・修辭疑問文

(43) Who could imagine that someone would voluntarily undertake such laborious work? (*Compass III*, “Unit 3 Lesson 5: The Man Who Planted Trees,” p. 131)

【固有名詞の様々な用法】

今回の調査では、固有名詞に関わる様々な用法が観察された。高等学校では、固有名詞に関する以下のような用法を体系的に指導されることは稀と思われる。

- (44) The Rosens are a Jewish family who are very close to the Johansens. (*Big Dipper II*, “Reading: Annemarie’s Basket,” p. 141)
- (45) It’s hard to believe that Henry was a Ground when you think how different he was from his brothers. (*Vivid II*, “Further Reading 2: the Joker,” p. 165 / *Big Dipper III*, “Lesson 25: the Joker,” p. 106)
- (46) Godber’s were famous for their cream puffs. (*Pro-Vision III*, “Reading: The Garden Party,” p. 161)⁸
- (47) She asked if I would take her to a little luncheon at Foyot’s. (*Crown I*, “Reading 2: The Luncheon,” p. 158)
- (48) The two young men walked out of Helen’s and took their places in the back seat, putting their boots on the pedals. (*Crown II*, “Reading 1: Sun-Powered Car,” p. 84)
- (49) So there was Ben, working and sweating in the hot sun, while Tom was relaxing in the shade, eating the apple and thinking up more plans for other unsuspecting boys. (*Mainstream II*, “Optional Reading 1: The Adventures of Tom Sawyer,” p. 72) (there isの後に固有名詞が来るケース)
- (50) That night, Mark dreamed that Hitler was across the river, but this Hitler wore jeans and his haircut was modern in spite of the mustache under his nose with sticky tape on it. (*Landmark II*, “Reading 1: What Happened to Mark?,” p. 72)
- (51) When I give the Silent Miaow I open my mouth as if I were going to miaow. (*Crown III*, “Story 2: The Silent Miaow,” p. 110) (一般名詞の固有名詞化)

【水平の方向性を表すupとdown】

通常、日本人英語学習者はこれらの副詞に関して、垂直方向を表す用法には精通している（「価格がアップ/ダウンする」など、一種の外来語として日本語の中にも浸透している）。しかしながら、以下のように水平方向を表す用法については慣れておらず、かつ授業で扱われることも稀である。⁹

- (52) I went to Dehra again in the summer and when the train came into Deoli station, I looked up and down the platform, knowing I wouldn’t find her but hoping just the same. (*Pro-Vision I*, “Reading I: The Night Train at Deoli,” p. 144)
- (53) He looked up and down the street. (*My Way I*, “Reading: The Girl in the Bank,” p. 149)
- (54) Yesterday afternoon, my mother took me up to London to see the dentist. (*Pro-Vision I*, “Reading 2: The Umbrella Man,” p. 147)
- (55) Of course, as soon as the car had disappeared down the road, the wife came out of the house, picked me up and carried me back inside, as I knew she would. (*Crown III*, “Story 2: The Silent Miaow,” p. 108)
- (56) One afternoon Jimmy Valentine, with his suitcase in hand, climbed out of a cab in Elmore, a little town five miles off the railroad down in Arkansas. (*Element II*, “Pleasure Reading: A Retrieved Reformation,” p. 154)

【助動詞shall】

shallに関しては、かつては以下に挙げるような例も高等学校で扱われていたようであるが（ワトキンス・小林・河上, 1997）、現在では、“Shall I/we~?” や “Let’s~, shall we?” といったパターンに限られるようである。¹⁰

- (57) “Ah!” the fox said. “I shall weep.” (*Element II*, “Further Reading 2: The Little Prince and the Fox,” p. 116)

(58) “You shall hear of this! Your president shall hear of this! ...” (*My Way III*, “Reading 2: Rules are Rules?,” p. 136)

(59) I will put that poor little boy on the top of the tree, and then I will knock down the wall, and my garden shall be the children’s playground for ever and ever. / You let me play once in your garden, to-day you shall come with me to my garden, which is Paradise. (*Polestar I*, “Further Reading: The Selfish Giant,” p. 167, 170)

【古風な表現】

今回の調査では、現在では古風と見える表現が改作の段階で削除されることなく保持されているケースが見られた。¹¹

- thou及びこの語を主語とする場合の動詞の形

(60) “Who hath dared to wound thee?”

“Who art thou?” (*Polestar I*, “Further Reading: The Selfish Giant,” p. 170)

(61) THOU SHALT NOT DRINK / THOU SHALT NOT MAKE LIGHT OF TRAPS / THOU SHALT NOT MAKE LIGHT OF FIRE (*Genius II*, “Read On! 5: Snow Crossing,” p. 182, 183)

- ye

(62) “Gather ye rosebuds while ye may,” Keating repeated. (*Prominence III*, “Option 2: Dead poets Society,” p. 160) (冒頭の “Gather ye” のように、命令文において一般動詞と主語の語順が入れ替わっている点でもこの文は古風である)

- 本動詞haven’t

(63) People haven’t time to learn anything. (*Element II*, “Further reading 2: The Little Prince and the Fox,” p. 114)

- that which

(64) But in a story I can steal her soul. I can revive, at least briefly, that which is absolute and unchanging. (*Polestar III*, “Further Reading: The Things They Carried,” p. 159)

- その他

(65) “Who hath dared to wound thee?” cried the Giant (*Polestar I*, “Further Reading: The Selfish Giant,” p. 170)

(66) Shiro, a bit taken aback, shielded Kanko behind him and stood his ground. The little fox, named Konzaburo, shaking his head twice and thrice, merrily said.... (*Genius II*, “Read On! 5: Snow Crossing,” p. 178)

また、文法とは異なるが、古風な綴りも見られた。

(67) “You must tell him to be sure and come here to-morrow,” said the Giant. / “You let me play once in your garden, to-day you shall come with me to my garden, which is Paradise.” (*Polestar I*, “Further Reading: The Selfish Giant,” p. 169, 170)

【その他】

その他、単発的にしか見られなかった文法項目を以下に一覧にして示す。

- ・ aroundと類似した意味のabout

(68) Shiro and Kanko turned about in surprise to see Konzaburo before them. (*Genius II*, “Read On! 5: Snow Crossing,” p. 181)

(69) He lounged about town in his quiet way until he found out what he wanted to know. (*Element II*, “Pleasure Reading: A Retrieved Reformation,” p. 157)

- ・ , though

(70) He was always kind of slow, though. (*Power On II*, “Reading 1: After Twenty Years,” p. 60)

(71) He never confided it to her, though. (*Discovery III*, “Reading 1: Love at First Sight,” p. 53)

(72) Nobody knew whether they were really interested in the lesson, though. (*My Way III*, “Reading 1: A Special Moment in the Third Period,” p. 128)

- ・ 強調のdo

(73) But I did find a few bits of New Magical Cheese. (*New One World III*, “Supplementary Lesson 1: Who Moved My Cheese?,” p. 75)

- ・ 本動詞のwill

(74) And then I concentrated. I willed her alive. It was a dream, I suppose, or a daydream, but I made it happen. (*Polestar III*, “Further Reading: The Things They Carried,” p. 160)

- ・ 前の文を先行詞とするwhich

(75) Wheat fields say nothing to me. Which is sad. (*Element II*, “Further Reading 2: The Little Prince and the Fox,” p. 114)

(76) Right away the kids laughed. No doubt he’d broken the pencil on purpose, but it wasn’t something you could prove, and so the teacher nodded and told him to hustle it up. Which was a mistake. (*Polestar III*, “Further reading: The Reading They Carried,” p. 156)

ちなみに、今回の調査対象には会話表現も含まれていた。文学教材の有用性を主張する研究は、文学教材の中には会話で使用される実用的な表現が含まれていることをその論拠の1つとしてきた(石川, 2010; 齋藤, 2004)。こういった研究は、すでに挙げたような文法項目に言及して文学教材の使用を敬遠する立場とは対照的である。しかしながら、英語教師の知識が不足しがちであるという点では同様であり、文学教材の扱いが敬遠される要因にもなりうると考えられる。以下に、今回の調査で見られた会話表現の例を示す。

(77) “Hello, George. Hello, Emily. – What’ll you have?” “Why, Emily Webb, - what you been crying about?” (*Grove III*, “For Reading: Our Town,” p. 151)

(78) “My! Ralph, how heavy it is. Feels like it’s full of gold bricks.” (*Element II*, “Pleasure Reading: A Retrieved Reformation,” p. 157)

(79) “... So what does he do? Decides to waste his money on coffees in the main square.” (*Perspective III*, “Optional Reading 2: Cellists,” p. 131)

(80) “Newt,” she said, “this is absolutely crazy.”

“How so?” said Newt. (*Prominence II*, “Option 1: Long Walk to Forever,” p. 67)

(81) “You bet! I hope Jimmy has done all right. He was always kind of slow, though.” (*Power On II*, “Reading 1: After Twenty Years,” p. 60)

6. 結び

以上見てきた通り、文学教材には高等学校で学習者に習熟を促す範囲を超えた文法項目が多く含まれていた。今回の調査対象とした文学教材は物語が大半であったため、結果として、物語形式と関わる文法項目が見られた。また、5.2で見たように、学習者が高等学校で学習する内容と一見矛盾するような表現も見られた。これらは日本の英語教育で取り上げられることはまだ稀であるが、実際の会話では英語母語話者に使用されている表現であり、「生きた英語」の一例と言える¹²。また、コミュニケーション重視の英語教育が叫ばれている中で、古風な表現が含まれていることは驚きであった。¹³ 一般に、文学教材は物語文が多いが、18～19世紀頃に名作と呼ばれる多くの物語が英語で執筆されている。このような作品が文学教材として教科書に採用される場合には、少なくともいわゆる後期近代英語期の文法項目が紛れ込む可能性がある。

今回観察された一連の表現は、改作の過程で原作から引き継がれたものがほとんどであると考えられる。今回の調査で分析対象とした文学教材のほとんどは正課外に配置されていたため、教科書制作者側は高等学校での英文法の学習範囲をあまり気にすることなく、原作の表現を残すことができたと考えられる。

もちろん教師はこれらの文法項目をすべて授業で直接解説する必要はないであろう。実際、これらの文法項目を含んだ表現には訳注が欄外に示されていることがほとんどであり、学習者はその訳注を参考にすることで、文章を読み進めることができる。しかしながら、その文法項目に対する教師の知識の有無が指導に大きく影響を与える場合もある。例えば、今回の調査では自由話法が観察された。西原 (2020a) によると、多くの文学教材で文章を音読するタスクが設定されていた。自由話法は、一般に「登場人物の言葉や思考を、地の文に投げ出された形で表現する」(安藤, 2005, p. 719) 方法と説明される。教師は、たとえ引用符で囲まれていなかったとしても、自由話法の箇所は登場人物の気持ちになって音読をするように学習者に指導しなければならない。そうしなければ、学習者はその箇所を地の文と勘違いし、淡々と読んでしまい、不自然な音読をさせてしまうおそれがある。

また、学習者から質問があった際には、当然教師はその文法項目に対するしっかりとした理解をもとに、分かりやすい解説を行わなければならない。特に、5.2で示したような内容は学習者に混乱を引き起こすと考えられるため、教師はその文法項目に対する正確な知識が必要となる。

今後、新学習指導要領に基づいた教科書が次々と出版され、その中に様々な文学教材が収録されることになるであろう。新しい文学教材を十分に活用し、提案されている文学教材の利点 (e.g., Lazar,

2016; 西原, 2019; 吉村・安田他(編), 2013) を享受するためにも、教師はその教材で出会う文法項目にしっかりと対処することが求められる。そして、新しい文学教材に対しても、引き続き本研究のような文法項目の調査を行うことは、そのような指導体制を整えていくことの一助となろう。今後も、一定期間ごとに類似した調査が継続して実施されることに期待したい。

注

- ¹ 前回の高等学校学習指導要領(2009年公示)に示されている通り、コミュニケーション英語Ⅰは外国語科において、すべての高校生に履修させる科目となっている。「英語を通じて、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を育成するとともに、情報や考えなどを的確に理解したり適切に伝えたりする基礎的な能力を養う」(文部科学省, 2009, p. 87) という目標が掲げられており、コミュニケーション英語ⅡとⅢはそれをさらに発展させた科目として位置づけられている。
- ² このような不安は文献の中で実証的に示されることは多くないが、教師同士の会話など非公式な場ではしばしば耳にされる。
- ³ さらに、授業中に学習者が文法項目に戸惑った際にも臨機応変に対応をすることができよう。
- ⁴ 本論文では、いわゆる高等学校用英語参考書等で取り上げられることが稀と考えられるものを「慣習的に高等学校英語教育での学習内容の外に置かれてきた文法項目」とみなし、抽出を行った。もちろん、いわゆる進学校などでは、ここで列挙しているような文法事項も教室の中で解説・指導されることがあるかもしれない。
- ⁵ 以下では、必要に応じて英文法用語を用いる。これらの用語については、有村・天野(1987)、安藤(2005)、瀬田(1997)などの英文法書を参照されたい。
- ⁶ *World Trek III* ではこの語の代わりに“lovely”が用いられている。
- ⁷ “different than”はこの課の中で3回も出てくるため、注意が必要である。
- ⁸ “Bireley’s”といったロゴなど、学習者は日本国内でこの表現に触れてはいるはずである。しかし、「固有名詞+’s」という文法構造の意味自体については理解していないと考えられる。
- ⁹ 学習者はこの文法項目につまずき、内容理解に問題を抱えてしまうことがあるようである(西原, 2020b)。
- ¹⁰ TOEIC などでは1人称の肯定文で“I shall”、“we shall”は見られる。
- ¹¹ なお、古風な表現が現在の英語母語話者の間で全く用いられないというわけではない。例えば、“thou”などは、英国王室でのウィリアム王子とキャサリン妃の結婚宣誓で多用されている。また、北米版のドラゴンクエストシリーズでは、しばしば王や魔王が勇者に対して“thou”を使って話しかけることがある。
- ¹² 例えば、海外留学中に仮定法に触れた際に“If I were ~”ではなく、“If I was ~”の形式が用いられていることに戸惑う日本人英語学習者は多い。
- ¹³ その一方で、会話表現が含まれていたことについては、文学教材に実用的な表現が含まれていることに基づいて文学教材の有用性を主張してきた研究(e.g., 石川, 2000; 斎藤, 2004)を後押しすることになろう。

引用文献

- 有村兼彬・天野政千代 (1987) 『英語の文法』 東京：英潮社.
- 安藤貞雄 (2005) 『現代英文法講義』 東京：開拓社.
- 石川慎一郎 (2010) 「文学テキストの語彙と文体—コーパス研究の視点から—」 岡田伸夫・南出康世・梅咲敦子 (編), 『英語研究と英語教育：ことばの研究を教育に活かす』 (pp. 193–210) 東京：大修館書店.
- 齋藤兆史 (2004) 「文学を読まずして何が英語教育か」 『英語教育』 第53巻4号, 30–32.
- 瀬田幸人 (1997) 『ファンダメンタル英文法』 東京：ひつじ書房.
- 西原貴之 (2019) 「コミュニケーション英語 I、II、IIIの文学教材に含まれる文学的言語表現」. 『教育学研究ジャーナル』 第24号, 23–31.
- 西原貴之 (2020a) 「コミュニケーション英語 I、II、IIIの教科書に掲載された文学教材の数とバリエーション及びその設問・言語活動」 『LET 関西支部研究収録』 第18号, 19–39.
- 西原貴之 (2020b) 「日本人大学生英語学習者の文学作品読解時のつまずき」 『JAILA Journal』 第6号, 26–37.
- 文部科学省 (2009) 『高等学校学習指導要領』 京都：東山書房.
- 吉村俊子・安田優・石本哲子・齋藤安以子・坂本輝世・寺西雅之・幸重美津子 (編) (2013) 『文学教材実践ハンドブック—英語教育を活性化する—』 東京：英宝社.
- G. ワトキンス・小林功・河上道生 (1997) 『これでいいのか大学入試英語』 (上・下) 東京：大修館書店.
- Lazar, G. (2016). Literature and language teaching. In R. H. Jones (Ed.), *The Routledge handbook of language and creativity* (pp. 468–482). London: Routledge.
- McRae, J. (1991) *Literature with a small “l”*. London: Macmillan.
- Widdowson, H. G. (1992). *Practical stylistics*. Oxford: Oxford University Press.